



第2回選考会 2018.9.8 (米子市淀江文化センター)  
参加者：143名 有効投票数：143票

# 歴史大河

鳥取県発大河ドラマ

第 3 号

編集発行

鳥取県を舞台に！歴史大河  
ドラマを推進する会

事務局

鳥取市佐治町加茂七三九  
田中精夫宅

## 第2回歴史大河ドラマ 選考会開催、「怪僧豪円を認定」

鳥取県内には、県ゆかりの歴史上の人物が埋もれている。本会はそれらを主人公にした歴史大河ドラマの発掘をめざしている。今年度は、「近代稲作の父～中井太一郎～」「三日月に祈る山中鹿介と亀井玄矩」「怪僧豪円」の三つのテーマからなる魅力ある物語が出揃い、去る9月8日、米子市淀江文化センターにおいて選考会を開催した。なお、「鳥取県社会福祉協議会・とっとりいきいきセンター」が「アバンク『生涯現役』と共催

した。

今後、ドラマ(大河ドラマ)だけでなく、朝ドラや民放テレビも含めてに取り上げていただくよう、関係先に働きかけていくことになる。

なお、選考会後の9月12日は「とっとり県民の日」であるため、「鳥取県再直ととっとり県民の日」と題して地域史研究家の小山富貴男氏に「講演していただき

(田中精夫 記)

### 選考基準

- ①主人公に、1年(50回分)にわたり興味を引きつけられるエピソードがあるか。
- ②主人公の人生に、我々に訴えかける現代と共通するメッセージ性、テーマ性があるか。
- ③主人公の人間らしさ・喜怒哀楽・主人公を取り巻く家族愛や恋愛、友人との絆、ライバルといった人間関係により、視聴者に感動を与えるか。



選考会発表の様子(2018.9.8)

左: 候補作品「怪僧豪円」  
上: 候補作品「近代稲作の父～中井太一郎～」



## 米子、倉吉で研究会

選考会をめざして検討会

2018.8.2 上鴨公民館  
面談者 北村隆雄氏ほか  
2018.8.5 尾高ハイツ  
面談者 吉島潤承氏ほか

## NHK表敬訪問

8月7日、共同代表の田中精夫と内田克彦、及び2017年度歴史大河ドラマ候補代表の片山長生氏、同朝ドラ候補代表の四井幸子氏は、NHK鳥取放送局(局長熊林御堂朋子氏)を訪問し局長に現状の報告をした。

「三愛のクニへ」澤田節蔵・廉三と美喜」の現況

◎推進会を立ち上げ、定期的に研究会を開催している。

◎会員が全員参加で分担して小説づくりをしている。

「赤とんぼの母」碧川かたの生涯」の現況

◎推進会を立ち上げ、定期的に研究会を開催している。

◎因幡万葉歴史館で特別展示会を開催し好評を博した。

◎県内各地での展示会を検討している。

NHKからは、本会の活動が広く県民に浸透することを期待しているとのことであった。

## 《選考会候補紹介》

### ☆近代稲作の父 ～中井太一郎

発表者 北村隆雄

久米郡小鴨村（現在の倉吉市）の出身で、明治時代において農業改良に一生を捧げた。①日本で初めて「田植え定規」を考案し、全国に「正条植え」を普及して回った。この「稲」を等間隔に植える正条植えは、いまでは田植え機に引き継がれ、省力化や病害虫に強い米づくりを実現した。②「水田中耕除草機」通称【太一車】を発明して雑草取りという重労働から米づくり農家を解放し、米の生産性向上に大きな足跡を残した。この太一車は東南アジア、アフリカなどでも使用が拡大している。③太一車の特許取得が契機になり好意的に雑誌に掲載され、実際に農民の作業が楽になり農作業や生活を大きく変えてきた。この頃から【全国巡回】が始まった。④太一郎は学術研究をまとめる。「帝国農家結合同」会員となり役員に任命され、農業や人間の生き方を発信した。⑤【地元】では倉吉農学校教授に任命され後輩を育てた。「鳥取県農会」が発足し、その名誉会員となって力を注いだ。

### ☆三日月に祈る山中鹿介と亀井茲矩

発表者 田中精大

山中鹿介は、1545年、富田庄で誕生。尼子一族であり、早くから尼子の家臣として仕えた。尼子滅亡後浪人となったが、尼子の遺児勝久を擁立し、尼子再興の兵を起して、富田城奪還後一步まで迫った。しかしながら、圧倒的な兵力を持つ毛利軍に退けられ敗退後浪人となる。望みは潰れたかに見えたが、その後織田信長を頼り、秀吉の配下に入った。再度尼子氏再興軍を起し毛利打倒の最前線に立ったが、はかなく散った。その不屈の闘志は人々から畏敬された。

亀井茲矩は、1557年玉湯町に誕生。鹿介を頼り、義兄弟となった。共に信長の配下で尼子氏再興に身を投じたが、上月城合戦で尼子氏が滅亡後、鹿介の志を引き継ぎ、因幡の地に尼子一族を根付かせた。秀吉に仕えて功をなし、秀吉から「琉球の守」の称号を賜った。秀吉の朝鮮出兵で水軍に属して李舜臣と海戦をし、名を馳せた。釜山機長城で中国・朝鮮軍を退けるなど戦功を挙げ凱旋した。秀吉の死後、関ヶ原合戦で東軍に属し勝利。長束正家の城受け渡して功を挙げた。しかし、鳥取城受け渡しに苦戦し、家康に鹿野3万8千石の城主にとどめ置かれた。後、茲矩は城下の整備と、殖産興業に尽くし藩民に慕われた。1612年当地に没した。信長、秀吉、家康の時代に、海外貿易を夢見て、盛んな行動力と交渉力で活路を切り開く茲矩の姿を華やかな安土桃山文化の時代風景で楽しんでいただく。

### ☆怪僧豪円～三山を復興した大山の名僧

発表者 吉島 潤承

比叡山延暦寺・備前金山寺・伯耆国大山寺は西日本天台宗の別格本山であり、日本人の心のよりどころの霊山として崇拜されている。奇寓かなこの三山は戦国時代多くの武将によって焼打ちに遭い焼滅した時期がある。この三山の復興に尽力した名僧が大山寺住職であった豪円和尚である。

一人の僧侶にこのような大事業に尽力し天皇および、なだたる武将の力を奮起させる力はどこから湧き出されたのか摩訶不思議な現象である。

平成18年立花書院で編集された著者伯耆坊俊夫氏の「小説・豪円和尚」を読み進むにつれて怪僧豪円の摩訶不思議の力の源を探ることが出来た。大山寺は神の山と地藏菩薩の神仏習合の霊山として願いが成就するというが、狐信仰もあながちである。大山寺山内の下山神社は守護神が白狐なのである。所以は大山寺縁起にも記されているが、大山寺山内では犬を飼うことが禁じられている。狐の天敵となるからともいう。この神社には狐に守られている伝説等が多く残る。「小説・豪円和尚」では豪円が大山での修行中一匹の子狐を助けたことに序し、豪円の生涯を物語るのである。

豪円の母は先祖聖武天皇の後、玉清姫と伝承され絶世の美女であり、豪円の母は玉清姫に似た美女だとも物語る。白狐はその母の容姿に変化し影日なたに現われ、豪円の諸行の苦難を助け、大事業も成功させたのである。

この半世紀NHKの大河ドラマでは地方の名士がとりあげられ、観光の一役を担っている。私達のふるさと山陰の物語が放映されることは少ない。

数有る歴史上の人物中、豪円和尚は全国には無名に近いと思うが、今搬鳥取県を大河ドラマにと思う有志は多勢である。怪僧豪円を推挙する理由の一つとして、日本一少数県民の鳥取県にもこのような名僧が存在した事実を楽しい物語としてシナリオ化し、大河ドラマにて登場させることを県民代表として送り出したい。「小説・豪円和尚」を参考に大河ドラマのシナリオを記する有志の挙手を望むものである。



## 特別寄稿

## 「山田風太郎の生涯」

有本俱子



作家山田風太郎のエッセイに、次のような文章がある。  
『眼前に死があったから本を読んだ。』

鳥取は母の実家に近いせいで子供のときからよく行った。それが私の知った最初の大会であった。それどころか、中学を卒業してからやがて私は東京へ出て来たのだが、それはもう戦争の真つただ中の荒涼とした東京で、大通りに街灯がずつととおくまでつらなっているというよつな風景は少年時の鳥取以来、戦後東京が復興してはじめて再会したといつていくらいである。

戦前の鳥取は、私にとって美しい「わたしの城下町」であった。その想い出は、その町が消えてしまったからいよいよ儚い。戦争前の鳥取は、戦争中大地震で消滅したからである。・・・』

風太郎の母は、浜坂町諸寄（現新温泉町諸寄）の小畑医院の一人娘（弟は六人いる）だったが、関宮（養父市関宮）の山田太郎医師と結婚し、大正十一年（1922）、風太郎が生まれた。風太郎が五歳の時、父は檀那寺で会議中急死してしまつた。父の死後生まれた妹と、母と風太郎は、

小学四年で母の実家に引き取られる。諸寄小学校の四年、五年を過ごしたのち、母が伯父と再婚したため、関宮に戻つてきて、関宮小学校を卒業、旧制豊岡中学に進学した。

ところが中学二年の時、今度は母が亡くなつてしまつたのである。わずか三十八歳の若さであった。優しく美しい母を亡くして風太郎は「魂の酸欠状態」におちいり、優等生から不良学生に転落していった。不良グループに、「風」「雷」「雨」「想」という暗号をつけて呼び合い、さんざ悪行を重ねていった。三回停学処分を受けている。養父は母の死後すぐに再婚し、継母が関宮にやってきたが、この継母とはなじめなかった。関宮の実家に「居場所を亡くした風太郎は、昭和17年、家出同然に出走し、上京する。沖電氣に務めるが、過酷な職場、貧しさのため、肋膜炎を病んで倒れてしまふ。兵役検査も肋膜炎を病んでいることで免れた。昭和19年、東京医学専門学校（現東京医科大学）に入学。昭和20年の東京大空襲で、学校は半壊となり、信州飯田に、学校疎開する。そこで終戦を迎え、東京に帰京するも、東京は焼け野原となつていた。下宿も焼けており、食べ物もなく、学校の図書室で寝泊まりしたり、沖電氣時代の上司の家に居候したりしてなんとか地獄のような20年を生きる。21年にいち早く創刊された探偵小説専門誌「宝石」に、懸賞小説の募集を見つけた風太郎は「雪女」と「達磨峠の事件」を投稿する。すると見事一等に「達磨峠」が入選。この賞の選者であった、江戸川乱歩は、風太

郎がまだ医学生三回生の若さであったことに驚き、その才能に注目した。その後乱歩の後援を得て、次々と「宝石」に小説を発表し、探偵小説家として作家デビューすることとなった。昭和24年には「第二回日本探偵作家クラブ賞」を受賞し、ひきもひかれぬ人気作家となつていった。

昭和33年より、「甲賀忍法帖」の連載をはじめ、以後いわゆる「忍法帖」シリーズが爆発的に人気を博し忍法作家として第一位の位置を占めた。昭和48年から今度は「明治もの」といわれるジャンルに果敢に挑戦、「警視庁草紙」「幻燈辻馬車」などの名作を発表してゆく。昭和61年からはノンフィクション「人間臨終図鑑」の大作を発表し、晩年には、「半身棺桶」「死言状」など洒落なエッセイ集にもファンを増やし、惜しまれながらも、平成十三年、七十九歳の生涯を閉じた。

ところで、実母の墓は鳥取にあると聞いて、疑問に感じた。諸寄の母の実家に聞いたところ小畑医院の小畑医師（風太郎の祖父）は鳥取の荒金村の開業医だったが、その名医の評判をきいて、無医村になつた諸寄村から村中の署名嘆願を受けて、荒金村から諸寄へ越してきたのである。小畑医師の祖父は、江戸時代、鳥取藩のお抱え絵師で有名な「小畑稻升」であるという。其れをきいて納得した。風太郎は小さいころより絵の抜群の才能があり、関宮の同級生たちは、将来きつと有名な画家になると思つていたという。

## 編集後記

今年の選考会は大盛況であった。初めて西部地区で開催し、参加者も百名を越した。

大勢の参加者が見守る中、発表者のブレゼンは一段と輝きを増し、静かな会場に浸透していった。私は山中鹿介の発表者であったが吉島さんの名調子と、北村さんの語りに心から拍手を送つた。

発表の後、投票である。西部地区の方の熱心な声援を受けて、豪円が最高得票となつた。中井太一郎、山中鹿介と亀井茲矩も来年以降、捲土重来を図つてほしい。

また、今回、兵庫県北部地区（但馬から山田風太郎が大河候補に加つた。発表には至らなかったが、鳥取との縁もあり、ぜひ加つてほしいと思つた。

さて、2年間の取り組みで、7作品が取り上げられた。澤田節蔵・廉三と美喜、碧川かた、淀屋、池田家三代、山中鹿介と亀井茲矩、中井太一郎、豪円である。鳥取セブンともいつべき、鳥取を代表する優れた人物たちである。投票数で上位を決めるのであるが、これら7作品すべてを鳥取県民の宝として輝ける姿にしてこの歴史大河ドラマづくりを進めていきたいと思つた。（田中精夫）

